

柑芦会 本部 ニュース

第 29 号 2021. 12. 1.



wakayama
univ.

国立大学法人
和歌山大学

—そして ここから—



1. 支部だより

北陸支部

北陸支部総会開催さる

北陸支部長 林 国敏 (大 41)

日本海の海の幸を堪能した北陸支部総会は北村会長も参加して11月21日に金沢市内で開かれた。林支部長(41期)のあいさつに続いて、各自が2年ぶりに元気で再会できたことを喜びあい、それぞれが近況を報告。初参加の北村会長からは自己紹介の後、大学、柑芦会の現状と課題、そして生涯アドレスを用いた名簿整備など、今後推進していく改革への取り組みの一端が語られた。

参加者からは、この機会を活かそうと北村会長への忌憚のない質問が相次いだ。寄付金の使途について、支部の地域割りについて、また現役生と柑芦会との交流の機会作りについてなど。北陸支部の今後について議題が移ると各自が日ごろの熱い思いを吐露し、活発な意見が交わされた。

今までは電話や郵便物のやり取りだけで、決められた日時の総会への参加を促す。どちらかと言えば、柑芦会の都合に合わせてもらう活動が主だった。これからは新しい拡大に向けて、会員各自の都合に合わせたオンラインミーティングやミニ懇親会を開くなど、時代に合わせた顔の見える交流を推進していくことを決議し、明年へ出発の集いとなった。



九州支部

九州支部総会開催さる

九州支部長 石川 和彦 (大19)

2020年、2021年は日本全体がコロナ禍でオリンピックの大イベントを始め、日々の生活においても振り廻されたような年月であった。

そういったなか、九州支部総会を2年振りに11月27日に開催したというか、開催できたというのが適切かもしれない。場所は博多駅近くの八仙閣本店で初めての会場だった。

ここ十数年来では秋に開催するというのは初めてのことで、数日来の好天にも恵まれ実におだやかな晩秋の趣きだった。『秋』というのは時折人恋しくなるものであり柑芦会にでも行ってみるかという気分になってくれたらという思いでこの時期を選択した。

集まった方々は6名と少なかったがいずれも気心が知れた方々で、この2年間の個人的な生活のあり方など貴重なメッセージを互いに披露しあった。人生観みたいなものは人それぞれなんだとあらためて思う。コロナ下では「内と外」という概念が強く意識させられます。家庭内と外、県内と県外、日本国内と外国という風な感じですか。そこでは自らがどう行動するかが生き方そのものに関わってきます。積極的に動くほど内と外を取り巻く円は大きくなるでしょう。精神のグローバル化とでも呼んであげたいようなある方の人生観には妙に納得させられるものがありました。

また、支部の活性化のためにはどうしたら良いのかという面でも建設的なご意見をいただき支部長としても大いに感謝したいところだ。

特に、長崎に住む支部長にとって会員数が圧倒的に多い福岡県内から副支部長ないし幹事長的役割ができる人を置いた方がよいとの意見がでた。これは私自身が支部長を引き受ける時から考えていたことでもあり適任者が見つからないでいた。本件が支部にとり当面の課題となることだろう。

最後に、秋発行の柑芦会誌を新鮮なうちに総会案内状と共に会員に届けることができるという利点があるので、次回の総会も秋開催を目指し、且つ定着したいと思っています。



2. 寄稿



学内引越し先からの改修中研究室

棟を眺めながらのやや長い呟き

経済学部教授 金澤孝彰

いま私は、経済学部研究室棟(西3号館)大改修工事のため、8月から経済学部よりもやや高台にある教育学部北棟(東3号館)の数学演習室に“仮住まい”中である。この演習室は5階にあり、窓越しに遠くは雑賀崎や日鉄和歌山(生粋の和歌山市城下町生まれ育ちの私は今でも“すみきん”と呼んでいる)を眺めることができる南向き部屋であり、もちろんキャンパス内の経済学部棟(西3号館)の改修工事の様子も一部見ることができる。

今般の学内引越しは、着任以来二度目となる。一度目は、本学着任1年後の1994年だった。1993年4月着任前の時点で経済学部教員スタッフは60名以上近くいたものと記憶するが、そこに経済学部だけで5人(当時はまだ経済と教育の2学部時代)も新たに着任することで個室研究室内の空きがなくなったのであろう、小野朝男学長(当時)からの辞令交付後、母校大学院(大阪市立大学)での研究科の先輩だった尾近裕幸さん(現・國學院大學教授)とともに4階中央エレベーターすぐのいかにも急拵えの南窓相部屋をあてがわれ、その後の一年間は院生時代の延長然となった。

翌春、他大学転出や定年退職の先生方の個室の空きができたことで、私は同階東側北窓研究室(現・大東文化大学教授の岩澤勝彦先生の部屋)に移り、尾近さんはその斜め向かいの南側窓の研究室(たしか飯尾要先生の御部屋だったかと記憶)に移られた。

以降、私は今夏までの27年間(引越し年の夏からの上海での2年間の在外研究期間を含む)を同じ部屋に居続けたことになるわけであるが、記憶に誤りがない限り、私が同フロア内では同じ部屋に最も長居した人物となる。したがってこの間、定年や他大学転出や在職中のご不幸で去られる先生を見送り、新任や他大学からの転入の先生を迎えるといった感じで、研究室前廊下で多くの同僚の出入りを見てきた。また研究室内では、インターネットが使えるようになった1997年以降は、机椅子の配置を変え要塞コクピット然にして研究しながらゼミ指導もできるように模様替えをしてきた。しかし、年月の経過とともに書籍や資料の量が書架のキャパをはるかに超えるぐらいに増え、室内スペースが手狭になっていき、今般の仮居室への引越しでそれらを梱包した段ボールが百箱近くに達し、今その大半が窓側机で作業する私の背後で未開封のまま圧迫感を醸し出しながら鎮座ましましている状態である。ほんの8カ月でいどの予定での“仮住まい”なので、もしこれら梱包段ボール全部を開けるとなると、来春、改修工事完了後の学部棟の戻る際にまた大変な思いをすることは必至であり、開封は今年度内の授業(講義、演習)や執筆論文(和歌山高商百周年記念紀要向け)関連のものにとどめている。

今般の引越し作業に際しては、こうした梱包作業以外に、室内でも長らくアンタッチャブルな空間で放置または散乱していた諸々の不要物の処分作業にも手を焼いた。あろうことか、この作業にとり

かかろうとする直前の1月に、健康管理のため二十数年間日々歩き慣れてきた筈の大学周辺坂道でよりによって転倒して人生初の骨折をやらかしてしまったわけだが、研究対象国の往年の精神主義的スローガン“自力更生、刻苦奮闘、発奮図強”が身体に染み付いていた所為であろうか、一連の作業を誰彼の助けにも依らずに独りでやってのけた。ただ、埋もれていた物々のなかにはあまりにも懐かしいものたちがひょっこり顔を出したりして、その度に、思い出にひたって作業が滞ってしまったことも少なからずあった。

末尾に一言二言。コロナ禍で一連の会議の多くが今でもオンラインになっていることや、同キャンパス内とは言え、学部教職員の仮居室が何ヵ所かに分散していることなどで、授業日に講義教室棟で見かける以外で同僚と顔を合わせる機会がめっきり減ってしまっていて、引っ越してからは、一種のディアスポラ感を毎日強く感じている。また、たかだかあと4～5ヵ月ほどの辛抱であろうが、もしかすると、改修工事終了時点で、「慣れとは恐ろしいものですねえ」的に今の仮居室から離れたくなくなっているかも知れない。そう思うぐらいに仮居室からの南向きの見晴らしが、四半世紀以上に亘って見慣れた北向きのそれよりも良い感じなのである（改修後は元の部屋とは別の北窓の西側研究室に入ることが決まっている）。

2021年11月19日記

3. 大学だより

紀州経済史文化史研究所

特別展「1969：和歌山大学の全共闘運動」開催中

期間：2021年11月16日（火）～12月17日（金）

同研究所長の長廣利崇教授から

「経済学部の歩みを知る上でも重要となる展示内容かと存じます。多くの方々に来場してご覧いただきたい。」とご案内いただきました。

展示の内容（HPのリンク）は下記をご覧ください。

<https://www.wakayama-u.ac.jp/kisyuken/news/2021111500058/>

以上

和歌山大学経済学部同窓会 柑芦会 本部 事務局

〒540-0012 大阪市中央区谷町 4-4-17 ロイヤルタワー大阪谷町 207号

Tel: 06-6941-4986 Fax: 06-6947-7925 E-Mail: honbu@kourokai.org



フェイスブック
